

---

# アキアカネと月見空

朱凧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アキアカネと月見空

### 【Nコード】

N5070J

### 【作者名】

朱凧

### 【あらすじ】

終戦後50年記念式典を控えた、カルミネ空軍第五師団付き整備士のルーカは、終戦の英雄・【使者】の一族の元を訪れることになる。

その途中、複葉機同士の争う姿を目撃したルーカは、予想もしない事態に巻き込まれて――。

戦後50年を舞台にした、異世界ファンタジー。

## 壱章・式典の準備

・壱・

大きく旋回。

それから、思い出したように急上昇、それに次ぐ急降下。ある程度の高さで水平を保ち、そこから曲がりくねった回旋に転じる。

正面のプロペラが空を裂き、左右に一对ずつ、上下に重なりワイヤーで繋がった二枚の翼が風を切る。

気持ち良さそうに、絵に描いたような青空を泳ぐ、浅い黒色の複葉飛行機を見上げて、ルーカは満足気に明るい緑の目を細めた。

ただっ広い飛行場の隅に立って複葉機を見つめるルーカは、飾り気のない灰色のつなぎと、汚れた革手袋。砂色の髪は短く、風に煽られて躍る。

しばらく機体側面に引かれた赤のラインを見せ付けるように飛んでいた複葉機が、ふと高度を少し下げルーカへ近付いてきた。機体と同じ色の、耳当てのついた飛行帽をかぶり、大きな防眩<sup>ぼうげん</sup>ゴーグルをはめた操縦士が、飛行場から見上げるルーカに向けて、ジェスチャーを寄越す。『良好』。当然、なんて思いながら、ルーカは拳を高く挙げることで応じた。

「ルーカ」

呼ばれて振り返る。飛行場には似合わない、白を基調とし、黒色と赤のラインでこの国を象徴する、堅苦しい軍服姿が歩いて来るのが見えた。斜めにかぶったベレー帽が風に飛ばないよう、しきりに気にしている。

「基地長」

半ば呆れながらルーカが声を返す。軍服と言っても、戦場へ赴き銃を取るような実戦向きの型ではないが、当然実生活において秀でている形でもない。そんなものを吹きさらしの飛行場で、一系の乱

れもなく整えられるはずもないのに、何度そう繰り返してもベレー帽をデスクに置いてくることすら良しとしないのだ、この御仁は。

一礼するルーカに、厳格な頑固者で名の通った壮年の男性が、軽く手を挙げることで応じる。この御仁こそが、ここ、カルミネ第五空軍基地の長であり、総司令であるアルジェンだ。

「どうだね、調子は」

「蜂のことでしたら、ご覧の通りです」

型通りの言葉の途中で、空を泳ぐ複葉機を振り返って見る。調整後のテスト飛行だということで、飛行士は思う存分遊び回っているようだ。異常の兆しは確認できない。

ふむ、とアルジェンは淡い琥珀色の目でルーカと同じ目標を追って、「見事なものだな」心なしか嬉しそうに呟いた。

「基地長も、あれくらいならできるでしょう？」

いくらか砕けた口調で、ルーカはアルジェンを窺う。彼は目尻にしわを寄せて笑った。

「確かに、わたしたち大厄災後の飛行士は、ああいった技術を磨くのに精を出したものだ。それも遠い話だ、もう目が見えんよ」

「大厄災から、もう五十年ですからね」

ルーカにとって全く実感のない数字を挙げると、アルジェンは感慨深げに肯いた。

ルーカは今年の冬でやっとな十八になる。五十年も前となると、まったく想像もつかないが、知識だけは常識として持っている。

五十年前、戦争が終った。

大陸の大部分を占める二国が、死力を尽くして争ったその戦火は、大陸全土を覆い、十六年続いた。それは後に【大厄災】と呼ばれるようになった。

今は和平協定が結ばれ、以後五十年間、大陸で戦役は起きていない。

当然のように、ことごとく軍備は縮小され、ルーカの属す空軍も

例外ではなく、近頃の任務は和平協定に未だに異議を唱える、自国の過激派を相手取るものばかりなのだという。整備士として基地内のドッグに引き籠っているルーカには、その活動がどれほど過激なのか肌を感じたことはないが、和平記念のイベントがあるたび、よくそうした活動者が捕縛されたという話を、飛行士たちから聞く。

そう言えば、とルーカが頭をもたげたとき、「そう、ルーカ」改めてアルジェンが彼女を呼んだ。

「ひと月後のセレモニーのことなんだが」

それは、大厄災終戦五十周年記念のイベントである。どうやらアルジェンも似たようなことを考えていたようだ。ルーカは肯く。

「我らがカルミネ空軍第五師団が参加するのは、判っているな？」

「？ はい」

残りひと月に迫った大イベントだ。知らないはずがない。

月の元で行われる、式典の名を借りた、大騒ぎ。セレモニー  
フェスタ

去る大厄災でもっとも活躍したのは、陸軍でも水軍でもなく、空軍だった。開発されたばかりの、僅かな場所にも離着陸できる複葉機は、鉄を含んだ赤い溪谷が多く、起伏の激しい我らがカルミネ国では、非常に重宝された。当時、カルミネの首相が女性であり、また複葉機の操縦士にも女性が比較的多かったため、赤蜂隊せきほうと呼ばれ、恐れられたのだそうだ。今でもその名残りで、複葉機は『蜂』と呼ばれることも多い。

その、言わば大厄災の象徴とも言える複葉機がセレモニーに参加することで、蜂に怯える日々は終り、平和になったことを示すのが、今回のイベントでの狙いだとルーカは聞かされた。

その為の、今日の整備でもある。万が一にも、墜落や暴走などを起こし、再び人々に蜂による恐怖を植え付けるわけにはいかない。

ところがアルジェンは風に暴れるベレー帽の下で、盛大に渋面を作っている。飛行場の強風ばかりが原因ではないようだ。

「どうかなさったんですか、基地長？ 残りの機体も、あと三日も

あれば整備し終る予定ですが」

「いや、もちろん君たち整備士には何の落ち度もない。困ったことを言い出したのは、とあるふたつ名だよ」

吐いて捨てるようにアルジェンが言つて、ルーカはその俗語に苦スラング笑しながらも納得した。

『ふたつ名』という俗語が示すのは、つまるところ、『貴族』だ。ルーカの名前は『ルーカ』だけであり、空軍基地長であるアルジエンも、それ以上に名はない。カルミネにおいては、苗字を持つことを許された者の一族こそが貴族であり、国の重鎮はおおよそ貴族たちで構成されている。そうした地位に就く者が多少のわがまを押し付けてくるのは、決して珍しいことではなかった。

ブン、と低いところを飛んでいた蜂が唸りをあげ、着陸態勢を整えているのを見やり、

「それで、なんと？」

ルーカは先を促した。

どここの誰をセレモニーで飛ばせる、ということなら、整備士ではなく飛行士に言うはずだ——例え、基地で一番の腕を誇る飛行士が、テスト飛行で国防費である燃料を浪費していたとしても、そんな話が先に整備士に届くことはない。

「使つて欲しい人材がいるんだそうだ。——機体、込みで」

「！ 機体も」

そういうことなら、話は別だ。ルーカは表情を引き締める。

「失礼ですが、その方は確かに信頼のおける方なのでしょうが？ 思想的にも、技術的にも、という意味ですが」

「技術の方は明日、彼と」そこでアルジェンがゆっくりと徐行する蜂を見返つた。

「確かめに行こうと思っている。思想の方は、安心していいと思うがね。君の目でも、確かめてくれたらいい」

「有名な方なのですか？」

何気なく訊ねたルーカに、アルジェンは苦笑を見せる。髪に白い

ものの混じり始めた基地長の向こうで、浅い黒のジャケットを着た飛行士が慣れた様子で着陸に成功した蜂から降りているのが見えた。「言い出したのは和平庁のふたつ名だがな」

言い訳のように前置きして、アルジエンが言う。

「セレモニーで飛ぶように他薦されたのは、かのハーゲン家だよ。」

【使者】の一族だ。こうなると、英雄というのも大変だと同情してしまうな」

久しぶりに聞いた名だ。何よりも先に、そう思った。

【使者】——終戦の英雄。争いの最中には、このカルミネにおいて蛮族と謗られたウイスタリア王国との、国境ぎりぎりに住まう、ひとりの男性だ。そのひと自身は、三年前、既にこの世を去っているが、その一族は未だに世界中から敬われている。

カルミネに住み、世の平和とは関係なく軍に属し、更に世俗と離れてドッグに籠るルーカにはあまり関係のない世界だと思っていたが、こんなところで繋がりができることになるうとは。

「それで。わたしは何をしたらいいのでしょうか？」

ルーカは整備士だ。セレモニーで飛行予定の機体がこのカルミネ第五空軍基地に運び込まれ、整備メンテナンスを受けることになるのならば、ドックに空きを作り、チームを編成する必要がある。もしウイスタリアの複葉機が来るというのなら、その知識も仕入れておかなくてはならない。

頭の中でいく通りもの一連の流れを想定していたルーカは、アルジエンによって紡がれた言葉に、ただひとつの反応しか返せなかった。

「明日から、君も行くんだよ。【使者】の元へ」

「——へ？」

ハンドルを捻り、エンジンを噴かす。遮蔽物がほとんどないため、騒々しい爆音は反響もなく消えていく。陽はようやく顔を出し始め

た。

革のグローブと、借りた飛行帽、防眩ゴーグルを確認する。黒のジャケットは首までジッパを上げ、黒いパンツの裾はやはり黒いブーツの中だ。

「大変だとは思うが、頑張ってくれ。本当に護衛は要らないのか？」  
「平気です。数が多いほど時間が掛かりますし、わたしも一応軍の者ですから」

「いや、しかしな……」

相変わらずの軍服で、ベレー帽を軽く押さえながらアルジエンが言い淀む。ルーカは眉を下げて微笑んだ。

「基地長。かの赤蜂隊の多くも、女性だったんですよ」

「それとこれとは別だろう。やはり女性ひとりを行かせるのは危ない。誰かひとりでも」

「基地長」

普段の汚れたつなぎを着てドックに籠っているときは、短い髪や口調からあまり誰も意識しないルーカの性別だが、こういう場合にはきちんと思い出されるらしい。ルーカはただ苦笑する。

アルジエンがおろおろする横で、チェロ——先日、蜂のテスト飛行を存分に楽しんでいた、同行の飛行士——が助け舟を出した。

「大丈夫ですって基地長。予定より丸一日過ぎても来なかったら、俺が蜂借りて捜します」

「しかしな、」

「基地長。こいつ、すげえ頑固ですから、なに言っても無駄ですよ。今から護衛役探してる間に、出て行くと思います」

へらりと笑うチェロを、ルーカは睨む。アルジエンの視線が寄越されて、慌てて目許を和らげた。

「……先方には、明日の昼から夕方には到着できるだろうとお伝え下さい」

「判った、伝えよう」

アルジエンが洪々といった体で返す。

蜂で向かえば大したこともない距離だが、基本的に蜂は単座であるのに加え、今回は国境を越える。正式な任務であるとは言え、元を辿れば貴族によるわがままが発端であるから、あまり公にしたいことではない。そんなことでカルミネの軍が、ウイスタリアへ行くわけにはいかない。

だからアルジェンとチェロは、越境列車で向かう。大厄災のあとに開通した越境列車は、カルミネとウイスタリアを一番安全に、一番早く結んでいると言われている。国境上で乗務員が入れ替わるために停車するので、そこで降りれば【使者】の住まいは近い。

しかし、その列車にルーカの席は、ない。

ルーカは暖機運転を続けるサイドカーを見遣る。そこは軍のマークの入った、工具を主とする荷物で埋まり、バイクのキャリアにも荷物がくくりつけられていた。

整備士の仕事は、機体の整備メンテナンスをすることだ。本来ならドックでチ

ームを組み行うことを、たったひとりでも何もない場所で行う。ふたつ名のわがままである任務にドックの人員を大きく割くことはできないからだ。チェロなどは徹底した精査をするわけでもないのだから、と言うが、公務であるという責任と、軍の整備士である誇りが、手を抜いた仕事をすることを拒む。

そういつた経緯で、大体どの基地でも派遣される整備士は、司令官や飛行士とは別途、荷物を満載したサイドカーで向かうことになっていた。

だからこそ今回は、国境に最も近い第五空軍基地が選ばれたのだとも言える。

「身分証持つてるな？ 案内状と、入国志願書と」

「だいじょうぶ」

「夜行獣に気をつけろよ。サイドカーは車幅がバイクと全然違うから、常に気イ配ってんだぞ、特にカーブは」

「判ってるって」

チェロが基地長の前であろうと関係なく母親のようなことを言うてくるので、ルーカは苦笑しつつも適当にあしらう。チェロとは兄妹のように育ったルーカにとって、彼の台詞が含む思惑の配分は、本気が四割、からかいが六割であることが手に取るように判る。

「では、お先に」

またチェロが何かを言い出さないうちにルーカは視線をアルジェンへ戻し、右の拳を右のこめかみに当てて敬礼する。アルジェンとチェロが同じように返した。

シートに跨がり、アクセル。

一層喧しい音が弾けて、砂埃が舞った。スカーフかマフラーでも持ってこれば良かったかとルーカが感じたときには、バイクは基地を後にしていた。

陽が落ちかける頃に、三度目になる休憩をとった。一度目はカルミネ国内での昼食時で、二度目は国境の関で強制的に止められた。想定してはいたが、若年なのを疑われ、軍の人間であるという身分証すら信じてもらえなかったため、予想していたよりも時間が掛かってしまった。

「偽装だったらもつとそれらしい嘘つくってば！」

がしがしと足元の土をブーツの踵で荒らし、今更になってルーカは国境管理官への憂さを晴らす。そして、ため息。

「これじゃ、明日のお昼についていうのは、無理かもなあ……」

少し道を外れた茂みの中、広葉樹の根元にバイクを停めてある。サイドカーにもたれかかり、簡易コンロで作った食後の茶のコップを、両手で包み直した。

軍に若兵は珍しいものではない。貧しい者は多く高給の国防軍を希望する傾向がある。なにせ教育は国費で、とにかく体力があれば

いいと思われている節があるからだろうが、大厄災後、軍備はかなり縮小されたので倍率はぐっと高くなった。そうなれば職業柄、当然若い人材を任用するのは自明の理だ。また、赤蜂部隊で著名な空軍には女子も多い。

それでもそれは兵における割合であり、整備士になると若く、なおかつ女子というのは、極端に少なくなる。加えて、

「これがダメなんだよなあ……」

ルーカはキャリアに細い鎖でつないだカードを引っ張り出した。

そこにはルーカの顔写真と、名前、生年月日、性別、カルミネ第五空軍基地に所属する整備士である旨が書かれている。基地長による承認印も、登録番号も不備なく記載されている。

そしてルーカの悩みの種である、階級も。

「第一級整備士……」

それは、整備士の中でもトップクラスを示す称号だ。実際、ルーカは弱冠十七歳でありながら、第五基地のドックの指揮をする整備士の副官の立場にある。

ドックの総指揮者が、たった一機の複葉機を診るために基地を空けるわけにはいかない。司令塔から個々に命令を受ける操縦士たちとは、そういったところが整備士は違う。今回のことも、適当な人選であると思わざるを得ないだろう。

「こんな階級<sup>トコ</sup>まで、来るつもりじゃなかったんだけど……」

どうしても軍にいたくて、でも歳が若いとか女だからとか言われるのが嫌で、がむしゃらに頑張ったら、こんなところにいた。

もう一度息を吐いてカードを放り出す。鎖が垂れてホイールに当たった。それを横目で確認したあと、少ししてから取り上げて、ルーカはキャリアにいそいそと挟み直す。

「さてと」食事を終え、カップを拭い、キャリアの荷物にきちんと直す。立ち上がって草を払い、バイクとサイドカーの陰に隠れるようにしてうずくまる。

ふいに、夕闇の静けさが身体を包む。

チエロにも注意された夜行動物の襲来が一番恐いので、黄昏時のみ眠り、夜も走らせることにしていた。そして夜明けにもう一度睡眠をとる予定だ。寝不足の働かない頭で機体を視ても、きつと何かを見落とす。第一級整備士として、落ち度のある仕事はできない。

――夜が明けるまでには、双子山の間を抜けて……

目覚めてからのコースを確認しているうちに、ルーカはまどろみやがて眠りに落ち、そして。

唸るような音で、静かに目を開いた。

路傍の茂みで聞くには、聞き慣れ過ぎた音だった。獣ではない。

どちらかと言えば、虫の羽音のような、そう――複葉機。

暗闇の中、ルーカは耳をすます。近付いてくる。

ウイスタリアの国境巡視隊だろうか。そんなものが組織されているなんて聞いたことがないが、ルーカがドックに籠っている間に教えることでもないほど常識になってしまったのかもしれない。

気を張り詰めて音を聞き、闇に目を凝らして木々を上空から照らすライトの光を探した。ルーカは細く息を吐いて、想定外の事態に早まる鼓動を鎮めようと努めた。

首にかけた銀のプレートを服の下から引つ張り出しておく。そこにはカルミネ空軍第五師団所属である証明が掘り込まれている。キヤリアの荷物をあさり、関所でもらった入国許可証も首に吊るし、ルーカは背筋を伸ばして音の方向を睨み上げた。

やましいことは、何もしていない。

大きな翅音。低空を舐めるように飛んでいる。――飛んで行く。

木々の間に機体の影を見た。真っ黒なカラー。所属を示すシンボルマークはひとつとしてない。少し遅れて、全く同じ複葉機がもう一機、先の一機を追うように飛んで行った。

ルーカは懐中時計を確認する。眠ろうとしてから、三時間が経とうとしていた。二機の複葉機が消えたのは、これから自分が向かう方角ではなかったか。

「もしかして、あれが【使者】の複葉機……？」

何故こんな刻限に、とは思うが、国境付近のここの地域には【使者】の一族しか居ないはずだ。

もしあれが本当に【使者】だったとしたら。到着したアルジェン達から事情を聞き、複座の複葉機でも飛ばしてくれたのではないか？ ご丁寧に、荷物を積むために二機も。サイドカーを少なくとも一晩は放置することになるが、夜、若年、女、ひとりであることを考えれば、それもまあ、不自然ではない。

「だ、としたら」

ルーカは整備士仲間にもたびたび指摘される独り言を遺憾なく發揮して、思考をまとめる。ルーカとしては声に出して確認した方が整理しやすいのだが、立場上その独り言が指示だと受け取られ、混乱させてしまうこともあるらしい。だからドックではなるべく気を払うが、ここには今、ルーカはひとりだ。

あの複葉機。さほど綿密に探索している様子ではなかったが、もしも、本当に探しに来てくれたのだとしたら。

ルーカはもう一度時計を見る。どうせ、夜も走らせるつもりだった。

「——行きますか」

行こう。幸い眠気は吹き飛んだ。身支度を整え、アクセルをかけた、シートにまたがる。騒音はそのまま獣避けになつてくれればいい。ライトを点けて、目を瞑り、再度ルートの確認をした。

「……よしっ」

小石を弾き飛ばして、目指す山裾へ向けてサイドカーが走り出す。ちらりと空を見るが、暗い空にあのひと際黒い影はない。ただ小さくいくつもの星が瞬いている。

軍規は厳しく、こんな時間に整備士が出歩くことはほとんど許されない。ルーカは口許に上がって来るにやけた笑みを隠すこともなく、更にアクセルを開けて夜を進んだ。

非日常に浮かれたルーカが異常に気付いたのは、双子山の兄山側、谷を見下ろす辺りに差し掛かった頃だった。

初めに感じたのは強烈な閃光、続いて、背筋に這い上がるような大きな翅音、否、耳に馴染んだ複葉機の飛行音。

ゴーグル越しとは言えどもその光の強さ、唐突さ、それに加えて夜の暗がりに慣れていた目は途端に眩み、ルーカは堪らずブレーキをかけた。耳をつんざく音がして、僅かしてから身体に当たる風が落ち着いた。サイドカーのお陰か、とりあえず転倒はない。

瞼の向こうの光は褪せているようだが、目の奥にはまだ強く光が残っている。

——なに？！

混乱する思考に響くのは複数機による飛行音と、風の音。そして束の間、絶え間ない発砲音が轟いた。

「嘘でしょ?!」

思わず咄嗟に目を開く。谷底から幾筋かの細く白い光の柱が立ち、それが夜空の姿を照らし出していた。二機の真っ黒な複葉機、それと対峙するかのような、真紅の複葉機が一機。どちらにも所属を表すマークは何もない。

【使者】のものだと思って追っていた黒い機体が、容赦なく機関銃をぶっ放している。真っ赤な複葉機は無駄な弾数は撃たず、不意をついて応酬する。

複葉機同士の撃ち合いなど、完全な戦後生まれのルーカにとって、物語の中の出来事だった。ゴーグルを上げることさえ忘れ、それに見入る。自分がその場に居るのだという、現実感が欠如していた。

黒い機体の内のひとつが、機首を巡らせる。

——回り込む気？ 危ない、一対二なんてやっぱり不利、

拳を握り締めて黒い機体を睨んだとき、向けられていた機首に、ルーカの思考は一瞬真っ白に塗り潰された。

見慣れた機首だ。プロペラ。回転すれば凶器になるから、整備のときにも多大な注意を払う。でも今はあんなに遠い。遠いから、だ

いじょうぶだ。危険はない。なのに、なんだ、この悪寒は。背筋が凍る。違う、違う、

――あれは何故わたしを見ているんだ！

気付いたときには、遅過ぎた。

連続する発砲音。目に焼きついた無数の火花。

土煙や轟音と共に山が削れ道が崩れ、ルーカは天地を見失った。

## 式章・とんぼの棲む里

・式・

それからどれほどの時間が過ぎたのか。

全身の疼くような痛みを起こされて、ルーカは呻きながらも恐る恐る目を開いた。

背後は岩と土の剥き出しになった崖、前方には針葉樹が空に向かってまっすぐに伸びている。

見えるものはすべて白茶けて、頭をもたげようとすると首の筋が酷く痛んだが、どうやら凶弾の直撃もなかったらしく、大きな怪我や出血はなさそうだった。そう確認して、ほうと息を吐き、ルーカは再び上体を倒して崖に背を預ける。

あの激しい戦闘の音は、もう届かない。

——とりあえずは、助かったみたい。

動くのはもちろん、起きるのも声を出すのも億劫で、ルーカはまた臉を下ろす。熱を持った傷が痛い、疲労感の方が強かった。

——あれはなんだったんだろう。

浮ぶ疑問にルーカは眉を寄せた。ウイスタリアで内乱でも起こっているのだろうか。しかし、それにしては、あの複葉機。

そこまで考えたとき、ひとの声を聞いた気がして、ルーカは緊張の糸を張り詰めた。耳を澄まし、神経を尖らせる。

「……」

どうやら、ルーカを探しているようだ。大陸の共通語で、ルーカを呼んで回っている。サイドカーのキャリアにつけた、あの身分証でも見たのだろう。

音を立てないようにそろそろと身体を起こし、手探りで見つけた拳大の石を掴んだ。先ほどの奴らが、ルーカの息の根を確実に止めようとして来たのかもしれない。油断は出来ない。

声と、土を踏む足音すら聞こえ出した方角を睨み、ルーカは息を詰めた。

そして相手は――予想だにしない方向から現れた。

「?!」

地面の震動、砂が弾かれるのと同時に、背後の斜面を転がるようにして突如現れた影に、石を握る手首を押さえられる。

ふたりいたのか。ルーカは苦々しい思いで己の迂闊を悔いた。

物音を聞き付けたか、ルーカを呼ぶ声は、もう聞こえない。

「ッ、」

「動かないで。急な動きは、傷に障るとさ」

咄嗟に腕を払おうとしたルーカを冷静な声音で止めたのは、黒の猫っ毛、澄んだ空色の目の、どう見てもルーカと同じくらいの年の少年、だった。

ルーカの表情に気付くと、少年は困ったように眉を下げてへにやりと、いかにも頼りなさげな笑みを見せる。

「びっくりさせてごめんとさ。でも、俺の家族、傷付けて欲しくなかったし。君に害をなす気も、俺達、ないから」

だから、許してとさ。言って少年はルーカの手首を解放すると、その石を握る手をぽんぽんと軽く叩いて示した。

その様子になんだか毒気を抜かれて、ルーカが石を手放す。すると、「ありがとう」莫迦正直に、少年が礼を述べた。

少しして、先程まで声を上げていた片割れらしい、鳶色の髪の青年が草を踏み分け、早足に歩いてくる。大きな眼鏡が似合わず、ずり落ちそうになっていた。

「シュウ」

「ユーイ。見付けた」

「見れば判る。怪我はないか？」

「あつはは、ないわけないとさ」

シュウと呼ばれた少年があっけらかんと笑うと、鳶色の髪の青年――ユーイはつまらなそうに唇を尖らせた。なにかを言おうとして

やめて、ルーカに向き直る。眼鏡の奥の灰色の目がどこか緊張を帯びる。

「どこか痛みますか？ ルーカ、さん」

「首が……少し」

「近くに集落があります。そこで手当てします——いいですか？」

ユーイの共通語は少しぎこちない。シュウの言葉も妙な感じに訛っていることを考えても、この付近のひとには独特のイントネーションがあるのだろうか。

頷こうとしたルーカはそこまで考えて、はたりと気付いた。

ここはカルミネとウイスタリアの国境近辺のはずだ。そこに住むのは【使者】の一族だけだと、ルーカは聞いている。

「あなた達は……【使者】の一族の方ですか……？」

だとしたら、あの戦闘を繰り広げていたのは、やはり【使者】だということだろうか。なら、相手は？

思考を巡らせるルーカを前に、ふたりの男は顔を見合わせ、それからユーイが言った。

「【使者】の家に用事ですか？」

「はい。仕事です」

「なら、夜の間に連絡をつけましょう。とにかく、我々の集落へ」

「……判りました」

どうやら、違うらしい。

ルーカは疑問に決着をつけられないまま、促されて立ち上がろうとし、

「——ッ！」

走った激痛に、うずくまる。ブーツで判らないが、強く打った所為で打撲くらいできているのかもしれない。

ユーイがすぐに屈んで、「失礼」とブーツの上からルーカの足首に触れる。シュウはすぐに木々の間に走って、適当な枝を二本拾ってきた。

「痛みますか？」

「っ、はい……」

「ユーイ、俺がおぶつてくから、おばあに怪我人連れてくつて伝えて」

「判った」

ふたりはてきぱきと作業を分担し、ルーカが止める暇もなくユーイは林の奥へ消えた。茫然とその後ろ姿を見送ってしまつてから、ルーカはハッと我に返った。慌てて大判のスカーフを広げるシュウに向き直る。

「だつ大丈夫ですよわたし！ 歩けます！」

「怪我をナメちゃいけないとき。折れてなくても、ヒビくらいは入つておかしくない、むしろそれくらいの怪我がないとおかしいくらいとき。君はそれだけのところから、落ちた」

だが、ルーカの台詞は正論に圧殺された。

ブーツを脱がされ、着々と足首が固定される。言われて見れば腫れているように見えなくもないが、気の所為のような感じもする。でも、とそれでも言いかけたルーカに、シュウはすっと人差し指を空に——いや、ルーカの頭の後ろに——向けた。指を追つて振り向くとそこには、さほど急傾斜ではないにしろ、相当な高さの崖がそびえていた。

「……っ」

「それに、悪化しても町医者に見せるには、ここからじゃ半日は掛かる。無理はしないに限るとさ」

「はんにち……」

真摯な表情で言われて、言葉を失う。そして、思い出した。今まで走つてきた道。国境近辺には【使者】の一族しかいないと言う情報。

思いがけず集落があるらしいが、それでもここが、両国の民に忌避された、国境沿いの僻地であることには変わらない。

「判りました……」

大人しく従うよりなさそうだ。

ルーカは仕事のために来ているのであって、仕事に支障をきたすわけにはいかない。

ルーカが言うと、シュウは「ん」と笑顔を作り、すぐルーカを背中を負った。

「っ、」

チェロ以外の男性におぶわれたことなどないルーカは——チェロにしたところで、十年も前の幼い頃の話だ——、どこに体重を預けたものか、戸惑ってしまう。

手の置き場にさえ困っておろおろしていると、そんなことなど全く気にした様子もなく、シュウが「あー」と言った。

「ちゃんと名乗ってなかったかな。俺はシュウ。君は、んーと、ルツカ？ ルカ？」

「……ルーカ」

深い意味はないとばかりの軽い口調で問われたその台詞に、だがルーカは一瞬、言葉に詰まった。

彼女の小さな返答に、ふーん、と生返事をしながら、シュウがちらりと振り返ってルーカの顔を確認する。

「やっぱルーカか。そう書いてはあったけど、『ルーカ』ってそっちじゃ確か、男の名前だろ？ まあ、ぱつと見たときは男の子かなって思ったけど、こうしてみたら軽いし柔らかいし、やっぱ女の子だよなあと思ってさ」

「ッ！」

どこから突っ込めばいいやら判らない。とりあえずルーカは極力シュウの背中から身体を離れた。

それから、唇を少し尖らせてぼそぼそと言う。

「確かにカルミネで『ルーカ』は男の名前ですが……わたしはそう名乗ってるんです」

「ふうん？　なんか籠められた意味でもあるのかな。まあそれでいいならいいんとさ」

さくさくと歩を進めながら、シュウはあっさりと引き下がり、沈

黙が落ちた。

月はちょうど真上に掛かる頃合いだが、その清光はなんとか木々の間から届く程度で、足許には湿っぱい闇がうずくまっている。それなのにシュウは危なげない足取りで進んでいった。

林を抜けた先に、その集落はあった。

ただしそのありようは、ルーカの想像と大きく異なっていた。

林を抜けた先の広い空間に思っていたような家屋はなく、崖に直接大きく穴が穿たれて洞穴のような様相を呈している、それが家なのだとシュウが告げる。よくよく見ると、地面に接したその洞穴――入口――の他にも、小さな穴がいくつも空いて、明かり取りの役目を担っているのが判った。

入口である洞穴は、内側に岩によく似た色合いの布を垂らすことで、家と外の仕切りとしてしているらしい。

「すごい……」

茫然と呟いたルーカに、「でしょ」とシュウが笑う。

不意にひとつの家の長い掛け布が揺れて、長い灰色の髪の女性が手招きした。

「シュウ！」

「うん」

彼は彼女に軽く返事をして、急ぐ風でもない歩調で砂利と土の混ざった道を進む。その歩き方が、背中のルーカに負担を掛けないためのものだと、そのときになってようやくルーカは気付いた。

同時に思い出す。そう言えば、言っていない。

「あの……シュウ、ありがとう、ごじます」

「これくらい当然とさ。でも、どういたしまして」

家の入口まで行くと、灰色の髪の女性はルーカの頭をわしわしと撫で、ルーカと視線を合わせた。女性の瞳は吸い込まれそうに深い

藍色だ。

「名前は？」

「る、ルーカ」

どこか高圧的な女性の口調に、所属を述べるべきが一瞬迷う。けれど、ルーカが再び口を開こうとしたときには、女性はニツと形のいい唇を吊り上げた。

「目もしっかりしてるし、傷やこぶもないな。とりあえず頭の方は様子見で良さそうだ。気持ち悪くなったらすぐに言うんだよ。ま、そうになったら手遅れかもしれないけどねえ」

「……」

「ダーニヤ、怪我には気の持ちようも大切なんだろ。不安にさせてどうするとかさ」

「あら、そうかい？」

ダーニヤというらしい女性はからからと笑うと、掛け布をめくってシュウとルーカを招き入れた。

家の中は、夜中だということにも関わらず煌々とランプが点っていた。ランプというよりも、カンテラを壁に突き立てた釘に引っ掛けているという様子だ。ちらちらと燃える炎は、時折ちりりと音を立てて煙を上げる。

家の中を進むと、天井と横幅が広がって、ルーカは部屋に着いたのだと知る。

ダーニヤが滑るようにして、部屋の中央に立っていた小柄な老女に近付き、何かを告げた。それはウィスタリアの言葉のようにも聞こえたが、うまく聞き取れなかった。

老女がルーカを見上げて、ルーカは無意識に姿勢を正した——シュウの背におぶわれたままなので、彼女が望むほどには格好はついていないが。

「まずは怪我の様子を診ようかね。シュウや、その寝台に」  
「うん」

老女の声は落ち着いて、少しだけ家の中に反響を残す。皺かのよ

うに細い目の奥で、静かにカンテラの灯りが揺れた。

シユウは指された白いシーツの寝台にルーカを下ろす。脚を寝台の端から床に垂らして座ったルーカは、視線が低くなって初めて、床が磨き抜かれた石であることを知る。シーツの下は、干してから叩いて柔らかくした草だろうか。そういうことを昔、チェロがやって遊んでいたのを覚えている。とにかくその寝台は、ルーカの知っている綿の感触ではなかった。

すると衣擦れの音をさせて近付いた老女が、ルーカの下ろされた脚に触れる。指の先はかさついて、だがどこか温かい。

「動かすよ」

「あ、はい」

踵を持つて、ゆっくりと足首を動かす。

「っ、」

途端、やはり痛みが走る。困った。これでは仕事に支障が出てしまいかもしれない。苦い悔しさが胸に渦巻いた。

だがルーカの胸中など知るよしもない老女が、優しく腫れた部位を撫でる。

「折れてはないようだね。くじいたか打ったか……とりあえず、冷やして安静にしておくのがいいだろう。ダーニャ」

「はい、おばあ」

老女の言葉に、ダーニャがすぐに長い髪を翻して、更に穴の奥へと駆け出す。

「お前も行つておあげ」

「はい」

くるりと猫みたいに身軽な動作でシユウも彼女に続いて、部屋の中には老女とルーカだけが取り残される。

そつとルーカの脚を下ろして、「さて」老女がルーカの瞳をまっすぐに見据えた。

「貴女のことは聞きました。カルミネ空軍の、整備士さんなのですね」

「……はい」

先に戻ったあの青年——ユーイと言ったか——からルーカの情報  
ステータスは伝わっているようだ。

唇を引き結び、氣を引き締める。国境周辺の辺境地と言えども、  
国境を越えた以上、ここは確実にウィスタリアの領土だ。

戦後五十年、ルーカにとっては遠い歴史の話だが、老女にとつて  
はまさにさなかを生きた時代だろう。ならばカルミネを、カルミネ  
の人間を嫌っていても、おかしくはない。

誰でも知っている。先の戦争を仕掛けたのはカルミネで、それに  
よって多くの命が奪い合われた。戦争が終ってなお、いや、戦争が  
終り落ち着いたからこそ芽生えた、カルミネ人の心の奥底にある、  
負い目だ。

ましてや軍属の人間となれば、思うところのひとつやふたつはあ  
るだろう。

与えられるのは恨み言か叱責か。身構えたルーカに、ところが老  
女は深く頭を下げた。

「巻き込んでしまつて、申し訳ない」

「えっ?! いえ、そんな!」

会ったばかりの老女に頭を下げられる謂われなど、なにも——巻  
き込む?

弾かれるようにして上げたルーカの顔を、老女の細い目がまっす  
ぐに見据えた。

「さつき、の」

「ここは蜻蛉族<sup>せいらい</sup>の住まう土地。この名、ご存知かね?」

「せいらい……。いえ」

そもそもルーカは、こんな場所に集落があることすら知らなかつ  
たのだ。素直に告げると、老女は厳かにひとつ頷いた。

そうでしょう、と。

「蜻蛉族は隠された民。この里は消された土地。おいそれと口に出  
来ぬことも多くある」

そこで老女は目を閉じた。

「先だって、【使者】の館へ遣いを出したから、……そうさな、昼までには、迎えが来るでしょう。どうぞそれまで、ゆっくりとお休みなさい」

「つまり、詮索するなっでこと、だよな」

夜が明けて、朝食まで振る舞ってもらい、そして迎えが来るまで時間の空いたルーカは、集落の広場に横たわった大きな丸太に腰掛けて、ようやく昨夜の出来事を処理し始めた。ルーカの他にも、年かさの婦人が、眠っているような顔で違う丸太に腰掛け、陽を浴びている。

名も知らない民族など、世界の狭いルーカにとっては数え切れぬほどあるに違いない。なにせ、北の隣国ウイスタリア、西の隣国クレアムは勿論、祖国カルミネですら知らない場所に根付く民族がいるのだろうという程度の認識だ。

だがそれらは、ひとえに『ルーカの無知』が原因で『ルーカに知られていない』のであって、存在を隠匿されているわけではない。とは言えども国境近くの集落とくれば、その存在意義は想像がつく。

敵国カルミネへの攻撃拠点。そうでなければ、密偵の隠遁地か。

どちらにせよ、ルーカにとっては過去の話だ。【大災厄】は、終わったのだ。それでもなお他者の深入りを厭うのは、やはりここにも負い目があるのだろう。

ルーカは多くのひとが腰掛けた為に滑らかになった丸太の表面をそつと指で撫でる。

だが彼らは、カルミネ軍属のルーカを集落に入れて、手当をしてくれた。真剣に気遣ってくれた。

「悪いひと達じゃ、ない」

ならばルーカにできることは、老女が暗にほめかせたように、余計な詮索をしないことだ。昼までには迎えが来る。それまで大人しくしておけばいい。

「……別に、ウィスタリアに怨みがあつて、軍にいるわけじゃないし」

「ルツカ！」

「どわあ?!」

いきなり背後から顔を覗き込まれて、危うくルーカは丸太からひっくり返るくらいに驚いた。

そんなルーカに驚いて、声の主・シュウが慌ててルーカの肩を支える。空色の目が真ん丸だ。

「どわあつて……。見た目どころか中身も男みたいとき、ルツカ」

「ほ、ほつといて! そ、それに、何なんですか、ルツカつて」

思わず地金が出そうになって、わたわたと取り繕う。シュウは気にした風もなくルーカの隣に座つて、にっと笑つた。

「『名乗つてるんです』」

「?」

「ルツカ、そう言つたとさ」

訝つて寄せた眉が、今度は疑問で固定される。シュウに名のことを聞かれたとき、ルーカはそう言つた、かもしれない。だがそれがなんだと言ふのだろう。

目で訴えるルーカに、シュウは自慢気に胸を張つた。

「普通、自分の名前言うときにそんな言い回し、しないとき。つてことはなんか事情があつて『ルーカ』つて名乗つてる。んで、カルミネでは『ルカ』は『月』の意味だったはずとき。戦後にカルミネでもウィスタリアでも流行つた名前……。あるとしたらそれかなと俺でもルツカはその響きが嫌で『ルーカ』つて名乗つてんのかなと俺は推測したんさ」

「……」

すらすらと並べ立てられた長広舌に、ルーカは啞然としてしまう。

何故ならそれは……ほとんど、合っていたから。

勿論それほど凝った命名ではないから、推測自体は難しくないだろう。だが、昨日会ったばかりの人間が、ルーカのことを考察したということが信じられなかった。

祖国カルミネでさえ『ルーカ』と名乗れば、少し変わった名前だな、という程度の反応で済むというのに。

「どう、当たり？」

「……はい」

「よっし！ あ、んで、じゃあ愛称ってことでルツカならいいだろうって思ったわけとさ。な？」

「……」

確かに彼の推測で全てなら、ルツカでもルカーでも構わないことになる。

実のところは、それだけでは、ないのだが。

「……そう、ですね」

ルーカは言って、口許を緩ませた。シュウが「だろ！」満面の笑みを浮かべる。

——どうせ、昼までの付き合いだし……。

おそらく、【使者】の館で仕事を終えれば、もう二度と会うこともないだろう。ルーカはこんな辺境地に瀕回に訪れるほど行動的ではない。

ルーカの胸中など知るよしもないだろうシュウは、空を仰いだ。

「んじゃ、ルツカ。【使者】の家に、なにしに行くとさ？」

「仕事、です。詳しい内容は言えませんが」

「ふうん……」

「ここから、【使者】一族のお屋敷は近いんですか？」

極力、集落自体に障りのない言葉を選ぶ。シュウは顔を上に向けてたまま、「馬で二、三刻くらいかな」と言った。

「たぶん馬車引いてくるから、もうちょい掛かるけど」

「……馬車」

普段複葉機に触れているルーカには縁遠い乗り物だ。国営寮はなにかあったときのために基地のすぐ傍だし、休日も特にどこへも出掛けないから、そもそもルーカにとって乗り物と言えば、複葉機だ。黙り込んだルーカの隣で、シュウも黙っている。特に話すこともないが、姿が見えなかったので捜しに来てくれたのかもしれない。

「……シュウ」

「んー？」

「ありがとう。……昨日のこと、忘れます」

「……」

そうでなければ、『目撃者』に口止めをしにきたか、だ。

目を見開いてルーカの顔を凝視するシュウに、微笑んでみせる。

ひとの顔色を読むのは得意だ。

大丈夫、とルーカが言ったとき、背後からダーニヤが大声で、【使者】からの使者が来たと告げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5070j/>

---

アキアカネと月見空

2010年10月11日02時47分発行